



2022年3月17日放送

印象に残る症例②

トラウマのフラッシュバックと鉄欠乏の関与が考えられる 多彩な自律神経症状を呈した症例

スタジオリカクリニック 院長 田中 理香

『スピリチュアル漢方体験』第2回、今回は、『トラウマのフラッシュバックと鉄欠乏が関与していると思われる多彩な自律神経症状のため就業できなかった44歳の女性』のお話です。

彼女は35歳の時、はじめは、職場のいじめ、同僚からのモラルハラスメントにあい、毎朝嘔気が止まらず、不安、抑うつ気分も強くなり当院を受診しました。痩せ型で、美人。いわゆる竹久夢二の絵のような女性です。

当初は仕事のストレスやハラスメントについて話してくれました。それによると、美人がゆえに妬みをかい、仲間はずれにされて、実際なかなか同じ仕事が続けられませんでした。また真面目な男性との交際を望んでいるにもかかわらず、さまざまな問題が持ち上がり結婚に至らず、安心できない状況にいました。この頃、過去の話聞くことはほとんどありませんでした。

それが、ある時、父親から殴りかかられたことを契機に家を出て一人暮らしを始めることになり、その頃からこれまでの壮絶な虐待について少しずつ話してくれるようになりました。

この患者さんは3人兄弟の第2子、長女として生まれました。幼少時より祖父からは、心理的虐待を受けてきました。例えば、本人の大切にしているものが勝手に捨てられたり、本人の人格を否定するようなことを言われ続けてきた訳です。加えて父親からは性的虐待を受けてきました。思い余って母に相談しても、取り合わずに見て見ぬふりをされたことから、「自分は愛されていない。いらない人間だから死んだほうがまだ」と小学校2年生からずっと思っていたということでした。3人兄弟の中で、兄は父から暴力を受けて早くに家を出て他県で独立し、妹はその兄と仲が良く、兄弟の中でも患者さんひとりがいつも仲間はずれでした。中学生の頃には、その2人が何らかの揉め事から2年くらい全く口を聞いてくれずに無視をされていたそうです。

一人暮らしを始めたころから過去の実際あった恐ろしい光景や、彼女の想像とも思われるようなイメージのフラッシュバックが頻繁に起こるようになりました。ベンゾジアゼピン系の抗不安薬は、飲んだ時に落ち着いても、薬の効果が切れてきた時に、恐ろしい不安が戻ってきて、死にたい気持ちが湧き上がり、かえって悪化させました。

そこで、フラッシュバックに使われる漢方薬の神田橋処方（桂枝加芍薬湯＋四物湯）とヘム鉄サプリメントを使ったところ少しずつ改善を見ることができました。

この頃、フェリチン値と寺澤の気虚・血虚スコアを観察する研究をしております、彼女の場合、1年間でフェリチン値は、16から86まで上昇し、血虚スコアも78点から12点まで軽減し、それに伴ってフラッシュバックも減少しました。鉄剤は胃が荒れるので飲めないということでしたので、鉄欠乏は食事指導とサプリメント（ヘム鉄、ビタミンB、C、E、亜鉛）で対処し軽減しました。そこに「血虚」に用いられる四物湯の4つの構成生薬のうち3つを含む当帰芍薬散の追加投与したことでさらに安定感が得られたと考えました。漢方薬がダイレクトに鉄欠乏を改善したのではなく、ダメージを受けた宿主側に働きかけ「血虚」を改善することで鉄剤への反応を良くしたとも考えられます。

今回、この企画の許可を得るために再度現在のフェリチン値等を調べたところ、フェリチン値は95.2、血虚スコアは6点と継続して改善していたことがわかりました。

ところが、興味深いことに特性不安指標のSTAIは、今回ちょうど就職直前に検査をしたため68と悪化、トラウマに関する出来事インパクト尺度IES-Rは、29点と目覚ましい改善値とは言えないことがわかりました。かつてあれほど1日起きておくことができないと言っていた不調が改善して、現在は就職できるまでの体調に回復しても、心理的な回復はまだ道半ばなのかもしれないということが考えられます。

言い換えれば、心の回復の前に、気虚、血虚が回復して身体の回復が先行するということがかもしれません。

フラッシュバックが減ってきた頃、彼女は結婚してここ7年ほど家にいて仕事には行っていませんでした。理由は家事と仕事が両立できるほど体力がなかったからですが、心理的にも不安定で感情コントロールが難しかったこともありました。その間も桂枝加芍薬湯＋

四物湯の神田橋処方、ベンゾジアゼピン系の抗不安薬のように急激に不安が消えて戻ってくるような現象が無く、そのマイルドな効果が安定化に役立っていたと思っています。これは、漢方で言うところの標治としての意味合いがあったと思います。

また、自分の出自への嫌悪感という、存在の根本が傷ついているところは、体質的な脆弱性に表れて、その治療は根治治療が必要なものでした。

特に、彼女のように西洋薬への抵抗が強く、薬にも人間にも不安が強い、愛着パターンの問題を抱えた人には、ゆっくり本人のペースで治療をすすめていくこと、そして患者さんの伴走者としての医師が共に悩みながら、どうやったら元気になるかを模索していくことで、幼少時からの希死念慮をどうにか乗り越える手立てとなるかもしれません。漢方薬はその触媒としてとても有難いものでした。

治療初期に、嘔気について、五苓散を処方していましたが、あまり効果がありませんでした。それでも、たとえ気休めにしかならなくても飲める薬があつてよかったという印象でした。実際、鉄欠乏に関しても神田橋処方よりも、サプリのほうが効いたという本人の印象でした。

自分にも飲める漢方があるということで身体に意識が向きはじめ、自分が生きているという実感が、少しずつ感じられてきたこと、人生は不快な辛いものだけでなく、変化するという実感が持てたことは、治療においてとても大切な気づきでした。思えば、漢方と主治医、夫というチーム医療で、深刻に傷ついた女性の育て直しということだったのかもしれない。

辛い時に、誰にも相談できずに1人で耐えるのではなく、誰かに頼ったり、思いっきり泣く、怒るという体験を夫と共に耐えて、今の彼女は朝起きた時の嘔気も減り「ああ、もう朝だ。死にたい」と思わない日も増えてきました。

戦争トラウマからと思われる祖父による心理的虐待を受け、また、その祖父から身体的虐待を受けて育った父から性的虐待を受けたことで、トラウマから先祖への深刻な不信感が芽生え、それが世界全体への不信感へと広がっていきました。それら先祖の因果が自分の体の症状になって出てきているのではという思いが彼女にはありました。漢方薬とその世界は、それらの呪縛と希死念慮から距離をおき、健康に、幸福に生きることも可能だという希望を与えたようです。何か自分を解放してくれる癒しがあるのではないかというイメージは「許し」というテーマにつながったかもしれません。実際に、2年前彼女の父は他界しましたが、その周辺において彼女が深刻なフラッシュバックやうつ状態に長い時間陥ることはありませんでした。あつても一過性で、夫の助けでどうにかなっています。

彼女の場合、「漢方を処方されればどうにか生きていける」という安心感が芽生えました。そんな「漢方安全地帯」を持てたことが、こころの全体性の回復というスピリチュアル・ケアに繋がったと思われます。

まとめです。

深刻なトラウマによって起きるフラッシュバックや、死にたい気持ちを持った女性が、標準的精神科治療とあわせて漢方処方を体験することで、自分がこの世に存在している意味を取り戻し、生きる希望を育てていく下地を作ることができました。足りないものは補う考えで、1人の人間の全体性は回復する可能性があります。